
**TOKYO FM/JFN のヒューマン・コンシャス・プロジェクトが
久保田利伸と KREVA のコラボレーションライブツアーを実現！！**

Netz Super Live

JFN Human Conscious' Choice ~Unity！

(出演:久保田利伸 KREVA)

TOKYO FMをはじめ、全国38のFM局が加盟する放送ネットワーク・JFN(全国FM放送協議会)が提唱しているステーション・キャンペーン『HUMAN CONSCIOUS～生命(いのち)を愛し、つながるころ～』のコンセプトに基づくプロジェクトがいよいよ始動します。

その第一弾として、日本の音楽シーンにおけるR&Bの第一人者、久保田利伸と、HIPHOPシーンをリードするKREVAによるコラボレーション・ライブが全国9ヶ所で実現します。

来年・2007年に、TOKYO FMをはじめとするJFN38局は、「JFN Human Conscious Project 2007」の一環として、全国の主要都市で大型ライブイベントを実施致します。

プロジェクトの核となるライブは、人と人がつながることによって新しいものが生み出される素晴らしさを音楽を通じて表現していくものとし、『Unity！』をテーマに、このコンセプトに賛同を得た、十分なキャリアで幅広い世代の支持を集める著名アーティストと、新進気鋭の若手アーティストとの夢のコラボレーションを実現します。

いまだかつてないコラボレーションによって生まれるサウンドは、両者の出会いによって全く新しい魅力を放ち、世代を超えて人々の「ころ」に訴えかけます。

音楽を軸に、人と人がつながり、新しいものを生み出していく素晴らしさを伝えていこう！

これが本企画の目的です。

この『Unity！』ライブ第一弾にふさわしいアーティストとして、TOKYO FMが久保田利伸とKREVAのお2人にコラボレーション企画をオファーしたところ、両名から企画主旨へのご賛同をいただくことが出来ました。そして、今回の豪華顔合わせが実現したのです。

『JFN Human Conscious' Choice ~Unity！』企画第一弾に、どうぞご期待ください。

※尚、本企画の詳細については、本日（12月28日）TOKYO FMほかJFN全国38局で生放送する「SUPER GRAND COUNTDOWN 2006 COUNTDOWN JAPAN 年間チャート2006」番組内（12時00分～13時55分）でも発表いたします。

《企画概要》

■イベント名称：Netz Super Live 『JFN Human Conscious' Choice ～Unity!』

■出演：久保田利伸、KREVA

■ツアースケジュール：

名古屋	5月11日（金）	Zepp名古屋
広島	5月13日（日）	（財）広島市文化財団アステールプラザ大ホール
福岡	5月19日（土）	Zepp福岡
大阪	5月25日（金）	Zepp大阪
仙台	5月27日（日）	Zepp仙台
金沢	6月1日（金）	金沢市文化ホール大ホール
東京	6月2日（土）	SHIBUYA-AX
松山	6月15日（金）	松山市総合コミュニティセンター文化ホール
札幌	6月23日（土）	Zepp札幌

■主催・企画制作：TOKYO FM/JFN

■特別協賛：Netz

■制作協力：ディスクガレージ

■ライブ参加方法：

詳細は以下の特設サイトからご確認ください。

特設サイトURL（PC、携帯サイト共通） <http://www.tfm.co.jp/unity/>

※12月28日13時30分OPEN予定

《久保田利伸プロフィール》

'86年シングル「失意のダウントウン」でデビュー。オリジナリティあふれる音楽性、質の高い楽曲、抜群の歌唱力、卓越したリズム感は多くの人々を惹きつけ、日本の音楽シーンにそれまで存在していなかった新しい風を送り込み、独自のスタイルで音楽シーンのパイオニアとなる。

'06年3月にリリースした『FOR REAL?』で邦楽ジャンルとしては通算11枚のオリジナル・アルバム、4枚のベスト盤（『The BADDEST』シリーズ）を発表している。さらに'93年からはニューヨークに活動の拠点を移し、海外の優れたアーティストと交流を深めてきた。ここで築き上げた強固なリレーションシップは、これまでに発表した3枚のワールドワイド・リリース・アルバムで遺憾なく発揮されており、日本/海外の枠を超えたアーティストとしてその活動は幅広い。

ライブの完成度にも定評がある。演出・プロデュースも自らが行き、常に新しい試みに挑戦しており、最高のエンタテインメント体験を通じて数多くの人々に感動を呼んできた。さらにその独自のパフォーマンス・センスは、追随する多くのアーティストに多大な影響を与え続けている。また、自身の音楽制作のみならず、ドラマ・映画主題歌、CM音楽、オリンピック・テーマソングなど多くのメディアへの楽曲提供経験もあり、それらの期待に十分応える仕事ぶりとはバランス感覚は、常に人々を喜ばせている。

永年のキャリアを持ちながらも、流行や時代に対するアンテナは高く、それらすべてが音楽に反映され、デビュー当初からの支持者はもちろんのこと、新しい世代からも常に熱いエールが送られている。

代表作：「LA・LA・LA LOVE SONG」「Candy Rain」「AHHHHH!」「ポリリズム」「Missing」「流星のサドル」「You Were Mine」など多数。

《KREVAプロフィール》

1976年生まれ、東京都江戸川区育ち。

CUEZEROとのユニットBY PHAR THE DOPESTを経てKICK THE CAN CREW結成。MCとしてだけでなくトラックメイカー、リミキサーとしての評価も高く、顔PASSブラザーズ（DJ TATSUTAとのプロデュース・ユニット）名義でミッシー・エリオットのREMIXも手掛ける気鋭。ラッパーとしては、HIP HOPの殿堂「B-BOY PARK」のMCバトルにおいて3年連続日本一の栄冠に輝くという、真の実力派。KICK THE CAN CREWとして紅白歌合戦出場を果たしたり、2003年発表のベスト盤「BEST ALBUM 2001-2003」をオリコンチャート1位に送り込むなどポピュラリティを獲得しつつも、クラブイベントでの現場レベルの空気を大切にしてきた彼だけに、その実力、センスは半端ない。また音楽のみならず、2003年にはTypo GraphicsのK10とCRIBのYOUGOとともにファッションブランド”fashion”を立ち上げ、2006年にはKREVAプロデュースによるGREEN KIDZのCD付きTシャツを販売するなど、時期毎に気になるアイテムを展開。

2004年6月には各自ソロ活動に専念すべく、KICK THE CAN CREWの活動を休止し、ソロシングル「希望の炎」リリース。9月にはメジャー1stソロシングル「音色」を発表し、オリコンウィークリーシングルチャートでベスト10入り（初登場9位）を果たす。11月には旧知の仲である盟友CUEZEROやRhymesterのMummy-Dをはじめ、BONNIE PINKなどをゲストに迎えた渾身の1stソロアルバム「新人クレバ」を発表。そして2006年2月には、ソロ2ndアルバム「愛・自分博」を発表し、HIPHOPソロアーティストとしては史上初の快挙となるオリコンウィークリーチャート初登場1位を堂々獲得！さらにスキルアップしブラッシュアップされたこの作品は、ソロアーティストとしての風格をも漂わせる充実作。邪悪なものは一切排除し、ヒップホップの枠を超えたところでよりピュアに音とリズムと言葉と向き合う結果生まれた、多くの人の心を動かす威力を持った歌心を感じさせる楽曲ばかり。全国7ヶ所8公演ツアーのファイナルを飾った日本武道館公演も完売御礼で大盛況の内に終了！HIP HOP界はもとより、日本の音楽シーン全体から高い評価を得る。各方面で話題を呼び、夏フェスの出演オファーも殺到。アーティストからの評価も高く、小林武史や櫻井和寿らによる「ap bank」、スピッツ主催の「ロックロックこんにちは！」などへも出演する。

2005年には自身のレーベル“くレーベル”を立ち上げ、SONOMIのアルバムプロデュースやコンピレーションアルバムの制作を行うなど、ソロと並行して活発に活動。またリミックスやゲスト参加、プロデュースワークも数多く、最近ではFAT JOE率いるテラー・スクワッドの紅一点ラッパー、レミー・マーとのコラボレーションも果たすなど活躍のフィールドを徐々に拡大。

また2006年夏には、AFRA率いるINCREDIBLE BEATBOX BANDとともにコカ・コーラCMへ出演し、お茶の間の認知度も増大。

BY PHAR THE DOPESTとしての活動も再開し、2006年12月6日にはシングル「恥じゃない」12月31日にはニューアルバム「だからどうした!」をリリース。

《HUMAN CONSCIOUS（ヒューマン・コンシャス）とは》

TOKYO FMをはじめとするJFNが2005年4月を機に、新しく打ち出したステーションキャンペーン。ここ近年のグローバリズムやIT革命、宗教や民族を軸とした新しい社会対立の発生から、日常化する凶悪犯罪、少年犯罪、いじめ・虐待や不登校などに至るまで、人を取り巻く危機的状況に対し、これを人の「こころ」の問題として捉え、人と人のこころのつながりを大切にする“こころのあり方”を改めて世の中に問いかけるキャンペーン、それが「HUMAN CONSCIOUS～生命を愛し、つながる心」です。

これを具現化するひとつの手段として、今回のプロジェクトを企画・立案致しました。